はじめに

本著は中国人の教師に招かれて、日本語を学生たちに教えに行った「満州国」に興味を持つ新米教師の記録である。その新米教師とは筆者の私である。

私は、定年後は「『満州国』とは何であったか」を探査したいと願っていた。日本社会文学会（私は当会に1990年に入会し、評議員をしていた）が「占領と文学」をテーマとした国際シンポジウムを沖縄で開催したのが1991年である。中国から参加した東北師範大学の呂元明教授は、日本の傀儡国家「満州国」についての共同研究を提案した。学会は提案を受けて、翌年から相互の国を訪問し、国際シンポジウムを５年間にわたって開催した。その後は、日本側の「満州国」に残る文化と文学についての発掘調査が７年間続いた。

日本側の共同研究も終わる頃に、私の役人生活も定年を迎えた。それを機に呂元明教授から、中国での日本語の教員生活を勧められた。私は継続して、「満州国」の研究と中国語の勉強もできると快諾した。そして、東北師範大学の外籍教師となって赴任した。

だが、その地に生活し、教壇に立ってみると、思いがけないことが始まった。学生や教師との出会いは、現在の中国を知り、歴史を学ぶことになった。同時に、「満州国」時代の建物が並ぶ街の姿から、過去の歴史がよみがえり、知識と探求心を煽られていった。

今日、日本人の持つ中国人のイメージは、旅行者の姿であり、その一方で隣国でありながら、長い歴史的文化交流にもかかわらず、お互い同士「嫌い」という世論操作の広がりがある。個人的には話をしたこともない。お互いの国へ旅行したこともない人たちの言葉が大多数だ。しかも、中国に対する「脅威と不信」は政治的認識となっている。だが、両国の経済面では相互依存はますます進んで、国民の生活と経済を支えている。

日本人にとって本当の中国が見えづらい。ましてや個人的な関係となると、「嫌い」が先に走って、友情などは築きにくいように見える。

だが、それは本当の姿だろうか。

中国の大地で日本語を教えている教師はたくさんいる。そして、日本語を学んでいる学生たちも驚くほど多い。学生たちは両国の深い絆を見出したいと願っている。

日本に親しみと希望を見出す中国の若者たち。そんな若者たちの未来をサポートする日本語。内向きになっている日本の若者の奮起も必要だ。

本書は３年間にわたって、東北師範大学外籍教師として過ごした記録の一部である。しかも、初年度の前期分である。残る記録と資料は手元にあり、いつか日の目を見ることを願っている。

中国での教師生活後は、思いがけず、ウズベキスタン・タシケント国立経済大学や、スリランカ・ケラニヤ大学、インドのベンガルールの日本語学校に赴任することになった。

国際交流という言葉は、誰でも聞きなれている。諸外国との人的、文化的交流を表しているからだ。しかし、国を離れて人と人との交流となると民際交流であり、少ない。その少ない交流手段として日本語が使われている。もっと日本語は広く国際語として活用されていいだろう。日本人は戦争のない平和と平等な社会の構築に貢献している。民際交流は、世界にとって必要なことだ。これからも海外に向かって活動を続けていきたい。

２０１７年３月１５日

建石 一郎